

青梅市文化財ニュース

第226号

平成18年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859）

歯の神様

歯の治療に、近くの石田歯科医院へ足を運んだ。

治療を受けながら、‘歯の一部が、自然にいつの間にか損傷を受けることを虫歯になる’と言
うが、どうしてそのように表現するのか’あるいは‘現在のような治療が行われていなかった
頃、人々はどのようにして痛みを押さえたり、治療をしていたのか’と疑問が湧いた。そ
こで石田医師に質問をしたところ、丁寧な答えを頂いたほか、『歯の健康と歴史』という冊子
を貸していただいた。

口の中を、歯磨きやウガイなどで常にきれいにしておかないと、中にいる細菌による発酵
作用で、カスから炭水化物を生じ、さらに乳酸となる。この乳酸が、歯の表面を作っている
エナメル質を溶かし、その後、次第に内部に浸透して、ついには歯髄に達する。表面のエナ
メル質を侵された段階で治療を行えば、大事には成らないが、それ以上になると、圧・冷・
熱などを敏感に感じ、いわゆる‘歯痛’となる。歯学知識が未だ十分でなかった頃、このよ
うなことが分かっていなかったため、寝ている間に、口の中にいる虫が、歯茎などに溜まっ
ている食物のカスを食べ、さらに歯までも齧るようになって考えられていたことから、‘虫
歯’と言うようになったという。

知ってみれば、簡単なことであった。虫歯にならないためには、最初の発酵作用が起きな
いように、歯磨きやウガイなどで口の中を常にきれいにしておくことである。

‘歯痛’になると、歯学や治療方法が未だ普及していなかった頃、人々は神様にお願
いし、すがりしか術はなかった。‘歯痛’になってからでは遅いが、（残念ながら）それまでは気付
かない。気付いてからでは遅すぎるが、歯髄まで侵されて、朝晩を問わず歯痛に悩まされる
人にとっては、顎をはずしたくなるような痛さに悩まされるため、神様をお願いした。

調べてみると、‘歯の神様’は各地に祀られている。青梅市内では、畑中三丁目金田清蔵
氏宅の西側にある畑地の中にある。

ここの神様は13世紀～15世紀にかけて多く造られた青石塔婆を御神体として祀っており、
下部は土に埋もれている。周辺には白い石灰の小石が散乱している。また、道路から神様ま

（裏面に続く）

での小道にも、小石が敷き詰められている。聞くところによると、昭和40年頃までは、付近に歯科医院もなく、虫歯になったり歯が痛くなったりしても、簡単に治療が出来なかった。そのような場合、付近の住民たちは、この神様に白い小石を持って、お参りして拝んだという。また、歯が抜けると、それを持参しては供え、良い歯が生えるように祈ったそうである。丸く白い石は、健康な歯を意味している。この歯の神様が、いつ頃から祀られたかについては不明であるが、庶民のささやかな信仰を示している。

奥多摩町境字桃ヶ沢では、‘むかし道’の脇に祀られている、馬頭観音と並ぶ地蔵尊が、かつては「むし歯地蔵尊」として礼拝されていた。地蔵尊は高さ約47cmで、享和2年(1802)11月の造立である。

(文責 角田 清美)